

あらかわ だいほうかいち
荒川大崩壊地

豪雨のたびに徐々に崩壊

荒川岳前岳の頂上近くから一気に崩れている大崩壊地。豪雨のたびに崩壊が発生している。崩壊した土砂の大半は、溪流に堆積し、その後の豪雨により土石流化して下流へ流下する場合が多いと考えられている。崩壊地から供給された岩石が堆積して、広大な「^{ひろがわら}広河原」を形成している。



荒川岳前岳の頂上近くから一気に崩れている大崩壊地

荒川岳上空から伊那谷を望む
手前に荒川大崩壊地や広河原が見え、遠くには大西山崩壊地や百間ナギも見える

【崩壊の要因】

- ・太平洋側からのプレートの沈み込みで付加体(混在岩)を形成しており、かつわが国最大の隆起する山地であること。
- ・1600年以降約140年間も樽木の原木サワラを切り出したこと、1700年前後(元禄年間)から幾度も大量のモミ類やツガ類などを切り出したことが、地質の不安定さを拡大させたと考えられる。

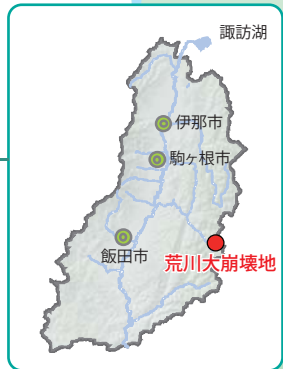
information

□ アクセス

南アルプス登山道より確認できる

□ 所在地

大鹿村



(国土地理院の数値地図50000(地図画像)を使用)



広河原とは

くれき樽木

主として荒川大崩壊地から供給された岩石が堆積して形成された広大な地。河原の幅約200~300m、長さ約1.5kmほど、標高約1,300~1,600m。前沢家古文書の記録によると、広河原の一部は1740~1760年代頃に形成されたと考えられる。

江戸時代初めから約140年間、大河原村・鹿塩村は、サワラを原木とした「^{くれき}樽木」と呼ばれる小木材(屋根板や曲物の原材料)を、年貢として幕府に納めていた。樽木は、小渋川、天竜川を経て、河口の静岡県掛塚まで運ばれ、さらに江戸まで船で運ばれた。